

25周年記念大会 ～続報

北海道・東北保存科学研究会の25周年記念大会の詳細が決定いたしました。日程は2025年3月22日(土)23日(日)、宮城県石巻市を会場に開催します。くわしいプログラムなどは年明けにお送りいたします。たくさんの皆様のご参加をお待ちしております！

阪神・淡路大震災30年シンポジウム 「文化財レスキュー、広がり」と深化の30年」

1995年1月17日5時46分、淡路島北部を震源とするマグニチュード7.3、最大震度7の地震が発生しました。神戸市を中心とする阪神地域および淡路島北部で甚大な被害をもたらしたこの直下型地震の発生から、2025年で30年を迎えます。初めて被災文化財の救援活動が行われた阪神・淡路大震災から30年、日本では多くの自然災害に見舞われ、その度に文化財の救援活動が行われてきました。阪神・淡路大震災における文化財の救援活動で課題とされたことにどれだけ対応できてきたのか、新たな課題は何か、これからは発生が予想される大規模な自然災害に対して、私たちはどのように備えればよいのか、過去の対応を振り返りながら、これからの文化財防災について考えます。

【日時】2025年1月19日(日)13時～16時30分

【会場】東京国立博物館 平成館大講堂

【定員】350名(事前申込制)

【参加申し込み】右のQRからお申し込みください。

(締切：1月14日)

(東京都 芳賀文絵)



研究会だよりへ情報をお寄せください

日頃の取り組みやイベントのお知らせなど何でもOKです。皆さまのご投稿をお待ちしております。(次号は3月発行予定)

担当：土屋明日香  asuka@hiroshige-tendo.jp
tel.023-654-6555

フォーラム 「ポスト・エキヒュームSの資料保存を考える」

2025年3月末をもって主要な燻蒸ガスの一つである「エキヒュームS」の販売が中止を迎える。資料保存における生物被害対策では、大規模な虫菌害が発生した際にガス燻蒸処理によって一度被害を初期化する対策が行われてきた。あるいは受入資料からの虫やカビの持ち込みを防ぐためや、災害時の被災した資料を対象としたガス燻蒸も行われている。温暖湿潤であり生物被害のリスクが高い日本の資料保存においては欠かすことができない対策方法の一つである。「エキヒュームS」の販売中止を機にこれまでの資料保存をとらえなおし、今後の持続可能な新しい資料保存の在り方について考える。

【日程】2025年2月21日(金)9時半～17時15分

【場所】東京文化財研究所 地下1Fセミナー室、会議室

オンライン配信あり

【会場参加 定員】170名

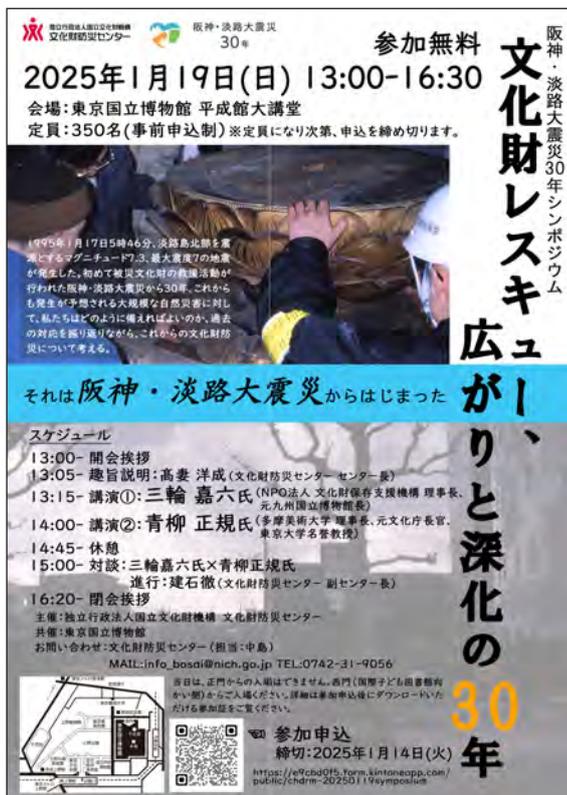
【オンライン参加 定員】1000名

(会場・オンラインいずれも要事前申込み/先着順)

【参加費】無料



(東京都 芳賀文絵)



参加無料
2025年1月19日(日)13:00-16:30
会場：東京国立博物館 平成館大講堂
定員：350名(事前申込制) ※定員になり次第、申込を締め切ります。

それは阪神・淡路大震災からはじまった
それが、**文化財レスキュー**の
広がり、
30年
「文化財レスキュー、広がり」と深化の30年」

スケジュール
13:00- 開会挨拶
13:05- 趣旨説明：高妻 洋成(文化財防災センター センター長)
13:15- 講演①：三輪 嘉六氏(NPO法人 文化財保存支援機構 理事長、元九州国立博物館長)
13:40- 講演②：青柳 正規氏(多摩美術大学 理事長、元文化庁長官、東京大学名誉教授)
14:45- 休憩
15:00- 対談：三輪嘉六氏×青柳正規氏
進行：建石徹(文化財防災センター 副センター長)
16:20- 閉会挨拶
主催：独立行政法人国立文化財機構 文化財防災センター
共催：東京国立博物館
お問い合わせ：文化財防災センター(担当：中島)
MAIL: info_bosai@nich.go.jp TEL: 0742-31-9056

参加申込
締切：2025年1月14日(火)
https://e9c6d9f5.form.kintoneapp.com/public/chdm-3022011?ymposuite



これからどうする！？
菌言
フォーラム
ポスト・エキヒュームS
の資料保存を考える
虫害

2025年3月末で主要な燻蒸ガスの一つである「エキヒュームS」の販売が中止を迎える。資料保存における生物被害対策では、大規模な虫菌害が発生した際にガス燻蒸処理によって一度被害を初期化する対策が行われてきた。あるいは受入資料からの虫やカビの持ち込みを防ぐためや、災害時の被災した資料を対象としたガス燻蒸も行われている。温暖湿潤であり生物被害のリスクが高い日本の資料保存においては欠かすことができない対策方法の一つである。「エキヒュームS」の販売中止を機にこれまでの資料保存をとらえなおし、今後の持続可能な新しい資料保存の在り方について考える。

2025年2月21日(金)
東京文化財研究所
会場：B1F セミナー室、会議室
ホワイエ(研究紹介ブース)
会場参加 + オンライン配信

主催：東京文化財研究所 共催：文化庁 文化財保存修復学会 日本文化財科学会



シウダー・ファレス自治大学 建築・デザイン・美術研究所
准教授 喜多 裕子

メキシコから、土の建築の材料・構法や保存をテーマに便りを寄稿しております。12号でご紹介しました、20世紀の西シエラ・マドレ山脈の風土的建築について、引き続きご報告したいと思います。

集落の発展と変化

エル・ウィリー（エヒード・イグナシオ・サラゴサ）の集落は、2018年に完成した舗装道路ができる前まで、クエバ・デ・ラ・オジャ遺跡への入口となっていました。一番近いヌエボ・カサス・グランデス市から、未舗装道路で片道4〜5時間かかっていましたが、現在は舗装道路で1時間半ほどに短縮されました（図1）。

図1. カサス・グランデス地域・西シエラ・マドレ山脈北部 (Topo Map USGS-esri)



舗装道路ができる前から、ヌエボ・カサス・グランデス市への人口流出は始まっていましたが、行き来が楽になったことと、子どもの教育や仕事のため、20〜60歳の家族がカサス・グランデスの街や、ヌエボ・カサス・グランデス市に移住するようになり、エル・ウィリーの住宅の半分は週末や休暇のための家や、退職後の住居となってきています。村に定住している人たちの住宅は、伝統的な、日干しレンガの壁に、傾斜のついたトタン屋根のものですが、新しい住宅の多くはログハウス、もしくはコンクリートブロック造です。新しく建設された州の診療所は、村の集会所などの公共建築と違い、その土地の文脈を考慮しない、他の都市に建てられる州の建造物と同じ紋切り型の種類のコンクリート造になっています。海拔1900メートルで、ヌエボ・カサス・グランデス市よりも500メートルほど高く、針葉樹も見られますが、夏はコンクリート造の建物では、エアコンが必要になってしまいます。エル・ウィリーには、電気やガスは通っておらず、水は湧水を使い、電気はソーラーパネルで発電、バッテリーで蓄電し、主な火力（コンロ、ボイラー、ストーブ）は薪を使い、LPガスのタンクを台所で予備に使っています。日干しレンガの住宅では、夏は窓を開けて換気をするだけで涼しく、冬は薪コンロやストーブで暖めた空気はなかなか冷えません。定住している人たちの住宅が日干しレンガであり続けるのも、風土に合っているためと考えられます。

伝統的建築の記録

こうした歴史的な住宅が少しずつ減少していく中、記録と評価が必要と考え、2020年から目録の作成を始め、巻尺やレーザー測量器による伝統的住居の二次元図面の作成、地上及び空中写真測量による三次元点群データの作成を行っています。クエバ・デ・ラ・オジャ遺跡の調査を始めた2016年からしばらく治安は良かったのですが、残念なことに、2022年以降、麻薬犯罪組織が村の一部の空き家や土地を買い取り、もしくは占拠し始めたため、空中写真測量による村全体の詳細な地図作成は中止になっています（図2）。

図2. エル・ウィリーの集落の伝統的建築の記録 (2020~24年)



伝統的建築の類型 (図3)

目録作成の中で、住宅もしくは物置の類型として見られたのは、大きく分けて、1) 板壁の小屋、2) ログハウス、3) 1~2部屋の日干しレンガ造の住居、4) 屋内にバスルームがある4部屋以上の日干しレンガ造の住宅、の四つになります (図3)。

図3. エル・ウィリーの集落の伝統的建築の類型



2) の類型は全て、北アメリカから19世紀半ばに西シエラ・マドレ山脈一帯に伝播した、丸太の上部に切り込みを入れて組み合わせるタイプのログハウスです。19世紀後半のモルモン教徒の移住に伴って普及したとも考えられます (図4)。また、現在は空き家1軒の例が残るのみですが、屋根葺き材は、トタン以前は、松の板だったそうです (図5)。

図4. 丸太の組み合わせ方 (著者撮影、2024年)



図5. 松板葺 (スアレス・ガルシア撮影、2024年)



今回は、聞き取り調査を行なってわかった、伝統的建築の変遷とその要因に関して紹介したいと思います。